

に影響を及ぼしている。彼は依然として静かに存在し続けている」という。私もそう思う。現在はピオンが広く大きく注目され研究されているが、こと臨床においてはローゼンフェルドの著作を脇におきながら、日々の臨床に取り組んでいる人も案外多いのではないかと思う。私自身、日々の臨床の中で出会うわからない事態に対して、ローゼンフェルトから学び、ともに考えてきた実感がある。

ローゼンフェルドの著作『精神病状態』『治療の行き詰まりと解釈』が日本語ですでに読めるのは心強い。ただ、メラニー・クラインから続くクライン派精神分析の取り組みに馴染みがないと、ローゼンフェルドの記述は何を言っているのかチンプンカンプンかもしれない。本書は、ローゼンフェルドから学びたいと思いながらも、なかなかその著作に近づけない人にとって最適の入門書である。さらにローゼンフェルドに馴染みがある人でも、本書によって、彼の取り組みの現代的意義を再評価するきっかけになると思う。著者のヒンシェルウッドは、読者をクライン派精神分析へと橋渡しするのにうってつけの書き手である。『クリニカル・クライン』で見せたように、原著者の症例や記述を使いながら、概念の変遷や射程についてわかりやすく伝えるのを得意としている。本書に関しては、訳者が言う「ローゼンフェルドが（中略）観察し描き出す“精神病世界”や最早期のこころの世界を、これほどわかりやすく説明した本は他に見当たらない」という感想に、私も同感である。

さらに言うと、この本はヒンシェルウッドの原著を翻訳しただけの本ではなく、独自の編集がなされている。著者のヒンシェルウッドだけでなく、訳者とこの本に関わった者たちのこの本を届けたいという熱意が伝わってくる。独自編集の構成は次のとおりである。松木邦裕による「序」、訳者によるまえがき、その後、ヒンシェルウッドによる本文が続く。本文が終わると、訳者によるあとがき、東中園聡による抄読（ローゼンフェルドに触発された随想）が続く。松木邦裕、東中園聡、村井雅美という精神分析臨床家が積極的に関わっているところからも、ローゼンフェルドのそれぞれの臨床への静かな影響力が推しはかられる。

ローゼンフェルドは、理論的には投影同一化の概念を精緻化し、ナルシズムの研究から病理構造体への展開を用意したが、その影響はむしろ臨床記述

精神病というところと出会う

ローゼンフェルド臨床の現在性

ロバート・ヒンシェルウッド著
村井雅美訳

木立の文庫、A5変型判288頁、4,400円、2025年8月刊

（むとう心理療法オフィス）**武藤 誠**

日本の精神分析界でローゼンフェルドがどれほど読まれているのか、私にはわからない。著者のヒンシェルウッドによれば、ローゼンフェルドはもはや同時代の人とは言いがたいが、「多くの人が彼から学び、いまなお彼の理論を実践し、現代の精神分析の世界

からにじみ出る態度にあると私には思われる。患者の心と自分の心で起こっていること、そして患者とのあいだで起こっていることを、粘り強く諦めずに観察し考え、その考えを相手にどうしたら伝わるのか試行錯誤し、患者とともに居続けようとする姿勢。そのような姿勢が静かに影響を与え続けているように思う。

本書はローゼンフェルドに取り掛かるに最適の本である。そして、この本を読み終わった後には、ぜひローゼンフェルド自身の著作に触れて欲しい。

原書：Robert Hinshelwood：Herbert Rosenfeld：
A contemporary introduction
